【特別支援学校用】

令和５年度学校評価 結果・学校関係者評価

様式１（特別支援学校）

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	佐賀県立うれしの特別支援学校

1　前年度 評価結果の概要	・継続して学校目標を掲げ取り組んできたことが定着し、すべての項目についてA（十分達成できている）の評価となった。 ・【特色１】特別支援学校としての専門的な指導・支援を基盤の上に、【特色２】の小・中・高１２年間の一貫教育の特長を生かしながら、キャリア教育や主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業づくり 教育を推進し、【特色３】希望進路１００%実現を目指して取り組み、7つの重点目標を踏まえて十分な成果を上げることができた。 ・働き方改革について、時間外勤務の減少はもちろんのこと、各業務の平準化・効率化を図ることができた。職員一人一人の意識が変化や「チームうれしの」で業務に取り組むことができた。本年度も唯一無二の学校づくりを目指し、「チームうれしの」で取り組んでいく。
2　学校教育目標	**キャリア教育を推進することにより、児童生徒一人一人が個性と能力を発揮し、心豊かにたくましく、積極的かつ主体的に社会に参加し、貢献する人間を育成する。**
3　本年度の重点目標	（１）「小・中・高12年間の一貫教育」の特長を生かす取り組みの推進　（２）特別支援教育の専門性の向上 （３）新学習指導要領を踏まえた教育の実践　（４）進路希望の実現 （５）積極的で主体的な社会参加　（６）地域の特別支援教育のセンターとしての役割の発揮 （７）教職員の働き方改革の推進

4　重点取組内容・成果指標　　**5　最終評価**

(1)共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標（数値目標）		達成度（評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	●児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着。（〇新学習指導要領を踏まえた教育の実践）	〇段階や「育成すべき資質・能力」を踏まえた指導目標を立て、手立てを講じ、「付けたい力をつけることができた」と回答した教員80%達成。	・「個別の指導計画」の年間目標および各学期の目標設定にあたり学習指導要領の各教科の段階との照会に努め、日々の授業に臨む。 ・学習指導要領に示される各教科等の目標及び内容に照らして到達度を把握し、指導する教科等や内容、育成すべき3つの力を授業シートに明記しする。また、研修日を通して、目標の設定、実態に応じた活動内容を検討し、各教科等を学ぶ意義を共有しながら、評価・授業改善を図る。	A	・段階や「育成すべき資質・能力」を踏まえた指導目標を立て、手立てを講じ、「付けたい力をつけることができている」と回答した職員は前期・後期ともに目標の80%以上であった。 ・児童生徒の到達度を把握し、「各教科等の指導」だけでなく「各教科等を合わせた指導（生活単元学習）」においても、教科等及び内容、育成すべき3つの力の目標を明確にし、手立てを講じた授業を行った。研修で各学年・コース毎に紹介された「生活単元学習」の授業事例においては、個人の目標の達成率80%以上と評価したものが8割を占めた。	A	・力がついているかどうかの判断、検証をどのように行い、どの部分が伸びてどの部分に課題が残ったのかを明らかにすることが必要ではないか。 ・80%は達成できていることは素晴らしい、できなかったと回答した20%の原因分析が必要なのではないか。
	〇「小・中・高12年間の一貫教育」の特長を生かす取り組みの推進 〇特別支援教育の専門性の向上	〇小・中・高の各学年・コースで指導内容を見通すことができたと回答した教員80%達成。 〇職員・保護者への「うれしの特別支援学校スタンダード」の周知徹底90%以上。 〇授業づくりや、障害に応じた支援に関する研修の実施。	・課程別縦割りグループでの研修を通して、学部間で目標の系統性や内容の関連性に配慮しながら、「生活単元学習」における小・中・高の各教科の指導内容を共有するとともに一覧にして、12年間の一貫した学習計画を作成する。 ・授業づくりや、障害理解と支援に関する研修会を実施する。外部研修会や書籍の案内を行う。	A	・小・中・高縦割りのグループを編成し、授業事例を紹介し合う研修を設け、指導内容や手立ての共有を図った。全校の「生活単元学習」の取組を一覧にして配布し、指導内容を見通した。 ・小・中・高の各学年・コースで指導内容を見通すことができたと回答した教員は、前期81%、後期72%と後期はやや減少した。来年度以降も時間をかけてより良い計画、実施を目指していきたい。 ・アンケートの結果、職員・保護者の95%以上が「うれしのスタンダード」に基づく学習活動について肯定的な評価であった。	A	・若手職員の育成が課題であり、これは今後の特別支援教育を左右する大きなである。若手を伸ばすためには、この取組にどのようにアプローチすればよいか、検討が必要だと思う。 ・学部毎の結果にややばらつきがみられる。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	〇図書を活用した教育実践。 〇社会におけるルールやマナーに関する指導の充実。	・授業時間はもとより休み時間等を含めた学校生活全体を通しての活動において、社会性や道徳心の向上に資する支援・指導・働きかけを行う。	A	・アンケートでは、前期、後期ともに90%以上の保護者および職員が、図書の活用や、社会におけるルールやマナーに関する指導の充実により、豊かな心の育成ができていると回答した。	A	・十分達成できている。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	●いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等）について組織的対応ができていると回答した教員80%以上。	・いじめに関するアンケート調査を年5回実施する。 ・高等部生徒の相談体験活動として、年間を通して2回以上生徒と職員の面談の時間を設ける。	A	・年間で6件のいじめ認知を行ったが、年5回のいじめアンケート等によって早期発見早期対応ができ、大きな事案に発展することがなかったと考えている。また、96%の教員が組織的対応ができていると回答した。 ・高等部生徒の相談体験活動として職員と生徒の面談が今年度も実施できた。職員と生徒が話しやすい雰囲気作りができたと思う。	A	・社会的な問題が多くあるが、ぜひ達成してほしい。 ・いじめ防止に対する手立てがきちんとととられているのであろうと思う。この問題は、今後もしっかり継続していただきたいと思う。 ・アンケートに書けない人もいるのではないか。日頃から児童生徒の行動を観察したり、ミュニケーションをとったりすることが必要。
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「学校職員は、子どものよいところを口頭や連絡帳などで保護者に伝えてくれていると思う」と回答した保護者70%以上。 ●「児童生徒が将来の夢や目標を持つように、一人一人の実態に応じた指導をしている」と回答した職員80%以上。	・児童生徒のよいところを褒めて、そのことを連絡帳などを通して保護者へ伝える。 ・児童生徒が自分で考えたり体験したりして、将来の生活を具体的にイメージする学習の充実。 ・児童生徒が自己の将来とのつながりに見通しをもったり、学習を振り返ったりするなど、授業改善を進める。	A	・授業の終わりや帰りの会で、「振り返り」の時間を設け、児童生徒のよいところを褒めたり、意欲的に取り組んだことを自ら振り返ることに継続して取り組んだ。その結果、前期、後期いずれのアンケートにおいても、95%以上の職員が連絡帳で児童生徒の変容や良い点を伝えていると回答した。同様に、保護者の95%以上がそう思うと回答した。 ・前期、後期いずれのアンケートにおいても、90%以上の職員が「児童生徒が将来の夢や目標を持つように、一人一人の実態に応じた指導をしている」と回答した。	A	・夢や目標を持つことが目的ではないと思うので、この項目は非常に進め方が難しいと感じる。
	〇希望進路の実現（進路開拓の取組）	〇児童生徒、保護者の進路ニーズに応じた情報提供や就業・施設体験の設定を行い、「できている」「おおむねできている」と回答した教員95%以上。 〇希望進路達成率100%の実現。	・地域の企業や施設、関係機関と連携・協働した研修、及び全学部における就業・施設体験先の新規開拓。保護者の進路研修の実施。 ・生徒、保護者の進路ニーズに合った就業・施設体験の実施と事前・事後の進路学習の充実。	A	・職員による新規企業開拓や校内留学等により、学部を超えて児童生徒の進路支援の理解に取り組んだ。企業等における就労支援研修会（今年度初開催）を実施し、障害理解等、共に働く職場づくりについて考えた。就業・施設体験の進路学習では、外部講師を招聘し生徒の相談に助言をいただいた。 ・高等部3年生28名のうち、17人が就職（A型1名を含む）、福祉サービス利用の生徒も全員が進路決定し、希望進路100%を実現できた。保護者の協力をはじめ、地域企業や福祉事業所との連携・協働が充実した結果である。	A	・100%の希望進路を実現されている。素晴らしい。
	◎積極的で主体的な社会参加	〇中学部・高等部の生徒たちの社会参加率90%以上、小学部の児童たちの参加率50%以上。	・学校間交流や地域の方々との体験交流活動を年5回以上実施。 ・部活動として障害者スポーツ大会、嬉野市文化祭への参加の他、アビリンピックへの出場や各種文化的行事や授業作品のコンクールへの出展の奨励。	A	・小中高においての学校間交流や高等部では地元五町田の音楽サークル「なんごとや」さんとの交流会など地域社会と積極的なかかわりが継続してできた。 ・年間を通じて多くの生徒や職員が保護者協力のもと各競技の練習会や大会参加をされており、来年の全国障がい者スポーツ大会に向けて熱心に取り組んでいる。	A	・交流事業の中で、児童生徒の皆さんが体験されることはとても大事なので、ぜひ継続、ならびに拡大してほしい。
●健康・体つくり	●望ましい生活習慣の形成	〇学校歯科医、歯科衛生士の指導のもと、ブラッシング指導を計3回以上実施する。 〇「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることが好きですか」の質問に、「好き」「やや好き」と答える児童生徒70%以上をめざす。	・歯科健診における要受診者に対し、受診勧告を2回以上行う。 ・遊びの指導や体育に関する指導の全体計画に基づき、授業や昼休みに指導を行う。 ・おたよりや部活動に関する情報発信などを通して、家庭での関心も高める。	A	・学校歯科医、歯科衛生士の指導のもと、ブラッシング指導を4回実施、県の事業でも1回実施した。要受診者への受診勧告を2回実施し、受診率は昨年と同程度であった。 ・遊びの指導や体育については、変化していく実態に応じて改善しながら実施した。10月に開催された全国障害者スポーツ大会佐賀県選考会では多くの選手が参加した。 ・部活動や障害者スポーツ大会（SAGA2024障害者スポーツ大会関連）について、必要に応じて文書とポスターで情報発信をした。	A	・歯科指導は卒業後あまり望めないので、保護者を巻き込んだ取り組みを進めてほしい。
●地域支援	●効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実（〇地域の特別支援教育のセンターとしての役割の発揮）	〇県西南部地区の特別支援教育のセンターとしての役割を担い、積極的に相談事業を推進し、巡回相談及び来校相談においては依頼に対する実施率100%を目指す。 〇各学部・舎と連携し、地域の事例に役立てるために、様々なチーム支援の事例を6事例以上まとめる。 〇分掌部と連携し、地域に役立つ情報提供を行うなど、様々な形で地域支援に取り組む。（4回以上）	・地域支援リーフレット及び巡回相談の案内を発信する。 ・「特別支援教育コーディネーター地区別連絡協議会」や「地域連携研修会」を実施し、地域の学校等のコーディネーターとのネットワーク作り及び情報共有を行う。 ・相談支援部の分掌部会で「ケース会報告」の機会を設ける。 ・「各分掌部が持つ専門性とセンター的機能」を一覧にし、年度末に実績をまとめる。	A	・11月に「地域連携研修会」を本校で実施し、地域の学校等のコーディネーターや市町教育委員会、エリアリーダーとのネットワーク作り及び情報共有を行った。協議した内容等をもとに二ーズの高い支援内容などをホームページに「地域支援」のコーナーを新設し、情報発信に務め、地域の学校に活用してもらうことができた。巡回相談等の相談業務は依頼に対して100%実施することができた。 ・他の分掌部と連携し、公開研修会の実施、授業づくりや緊急対応の参考となる資料の提供、検査器具貸し出しなど地域支援に取り組むことができた。（7回実施）	A	・地域の小中学校にとっては、巡回相談等がかなり役立っている。大変な状況であろうが、今後もぜひ巡回する職員数の増加をはかってほしい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・ひと月の時間外勤務45時間以内（または年間360時間）を職員一人一人が意識する。 ・管理職による出退勤システムの確認と時間外在校時間の把握をこまめに行う。	A	・ひと月の時間外勤務45時間を超えた職員数は年度初めの4.5月は多かったが、その後は10名以下だった。 ・管理職による勤務状態の把握だけでなく、各主事・主任によって学部内での業務調整や、分掌会議の時間短縮などが行われたことにより、ほとんどの職員が時間外在校時間の上限を守れた。	A	・教員が児童生徒に向き合い、指導できる時間を十分に確保することが必要。
	〇「チームうれしの」を合言葉に一人一人の時間外勤務削減	〇学部行事の進め方の工夫、情報共有の仕方の工夫、作成する資料の削減などに努める。 〇退勤時間を遅くとも19時30分とする。	・各業務内容の効率化と平準化を図る。 ・会議時間の短縮を図る。（資料の事前配布・終了目安時刻確認） ・19時30分超過勤務時の申請と管理職面談による業務内容把握と改善。 ・テレワークを活用し、時間単位で在宅勤務を可能にすることで、仕事の遅れを防ぐ。	A	・ほとんどの職員が19時30分退勤を意識しており、「チームで助け合いながら行うに当たることを心掛け、時間外勤務時間削減に努めることができている」と回答した職員は77%であった。 ・職員間や時期で業務量に偏りがある点については、さらに対策が必要である。 ・テレワークを利用した職員は一部であったが、一定の効果はあったと考えられる。	A	・時間内に業務を終えることは難しいので、具体的な対応をお願いしたい。

●・・・県共通　〇・・・学校独自　✪・・・志を高める教育

5　総合評価・次年度への展望	・保護者や職員のアンケートの数値を成果指標とした項目については、目標を達成できた。またそれ以外の項目についても、当初計画していた取組内容をほぼ実施、達成できた。よって、全ての項目で「A」評価とした。 ・アンケートの結果から、学校の教育活動に対して保護者の理解と協力を得られていることがうかがえた。このことは、職員にとって大変心強く、感謝したい。今後もその信頼に応えるべく、連絡・情報共有を丁寧に行い、協力しながら教育活動を進めていけるようにしていきたい。一方で、保護者へ十分に伝わっていない取組もあるため、情報発信の工夫も必要である。 ・本年度は、コロナ禍でできなかった行事や地域との交流も再開し、児童生徒にとって様々な経験ができ、成長につながったと考える。 ・地域の特別支援教育のセンター的機能としての本校の活動については、関係者の方からも大変助かっているという言葉をいただいている。地域の学校等からの相談依頼が多い中、今後も地域の期待に応えられる体制づくりが必要であると考える。